

## 蜘蛛の糸

芥川龍之介

一

ある日の事でございます。御積迦様は極楽の蓮池のふちを、独りておぼろ御歩きになっていらつしました。池の中に咲いてゐる蓮の花は、みゆな玉のようにまっ白で、そのまゆ中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居ります。極楽は丁度朝なのでございましょう。

マがて御積迦様はその池のふちに御佇みになって、水の面を蔽つてゐる蓮の葉の間から、ふと下の容子を御覧になりました。この極楽の蓮池の下は、丁度地獄の底に当って居りますから、水晶のような水を透き徹して、三途の河や針の山の景色が、丁度覗き眼鏡を見るように、はっ

## 蜘蛛の糸

芥川龍之介

一

ある日の事でございます。御積迦様は極楽の蓮池のふちを、独りておぼろ御歩きになっていらつしました。池の中に咲いてゐる蓮の花は、みゆな玉のようにまっ白で、そのまゆ中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居ります。極楽は丁度朝なのでございましょう。

マがて御積迦様はその池のふちに御佇みになって、水の面を蔽つてゐる蓮の葉の間から、ふと下の容子を御覧になりました。この極楽の蓮池の下は、丁度地獄の底に当って居りますから、水晶のような水を透き徹して、三途の河や針の山の景色が、丁度覗き眼鏡を見るように、はっさり見えるのでございします。

すもとその地獄の底に、陀多と云う

## 蜘蛛の糸

芥川龍之介

一

ある日の事でございます。御積迦様は極楽の蓮池のふちを、独りておぼろ御歩きになっていらつしました。池の中に咲いてゐる蓮の花は、みゆな玉のようにまっ白で、そのまゆ中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居ります。極楽は丁度朝なのでございましょう。

マがて御積迦様はその池のふちに御佇みになって、水の面を蔽つてゐる蓮の葉の間から、ふと下の容子を御覧になりました。この極楽の蓮池の下は、丁度地獄の底に当って居りますから、水晶のような水を透き徹して、三途の河や針の山の景色が、丁度覗き眼鏡を見るように、はっさり見えるのでございします。

すもとその地獄の底に、陀多と云う男が一人、ほかの罪人と一しよ

## 蜘蛛の糸

芥川龍之介

一

ある日の事でございます。御積迦様は極楽の蓮池のふちを、独りておぼろ御歩きになっていらつしました。池の中に咲いてゐる蓮の花は、みゆな玉のようにまっ白で、そのまゆ中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居ります。極楽は丁度朝なのでございましょう。

マがて御積迦様はその池のふちに御佇みになって、水の面を蔽つてゐる蓮の葉の間から、ふと下の容子を御覧になりました。この極楽の蓮池の下は、丁度地獄の底に当って居りますから、水晶のような水を透き徹して、三途の河や針の山の景色が、丁度覗き眼鏡を見るように、はっさり

